

ドイツ・ワールドカップも終了した。ただし、その幕切れは

ジダンの頭突きによる退場という、いささか後味の悪いものだった。事の真相は、本誌が出るころには明らかになっていくだろうが、あの場面を見たときに、ふと思いついたのは、南ドイツの古都ローテンブルクで訪ねたある博物館のことだった。

ローテンブルクは、ドイツ有数の観光コースであるロマンチック街道のハイライトというべき町である。中世のたたずまいを色濃く残したこの町は周囲を古い

城壁に囲まれ、中には木製の骨組みが露出した古風な赤屋根の家並みが続いている。散策

しているだけでも中世の世界にさまよい込んだような気分が味わえるのだが、なにより興味深かったのが、古い修道会の建物を改造して造られたという中世犯罪博物館だった。おとぎの国のような平和な町の雰囲気とは対照的に、その内部には中世のドイツで実際に使用されていた、あらゆる拷問器具がびっしり並べられているのである。

なぜ、そんな物騒な博物館がジダンの頭突きと関係あるのか。その前に、この博物館について簡単に説明

旅の曲者

41

拷問の館のこと

文・写真／田中真知 Tanaka Mochi

イラスト／bozen

したい。拷問道具のコレクションといっても、なにも猟奇的な趣味で作られた博物館ではない。犯罪博物館という名のとおりに、さまざまな具体的史料によって、中世ドイツにおける法と刑罰の歴史を明らかにしようとした、きわめて学問的な博物館なのである。とはいえ、そこに並べられた斬首用の斧や刀、座面や背もたれ一面に鋸を打った審問用椅子、「鉄の処女」と呼ばれる女性をかたどった人型棺、頭蓋骨を砕くための特殊な万力などを見ていると、よく

もまあ、人を痛めつけるために、これほど豊かな想像力が発揮されるものだとあきれる。

たとえば中世拷問具の横綱とも言える「鉄の処女」は、中に容疑者を入れて扉を閉めると、内側に打たれた鉄の針が体中を貫くという仕掛けになっている。しかも、針の位置は体格に合わせて変えることができた。また、扉を閉めると、まず命にかかわらない腕や脚が貫かれ、そのあとで腹や胸や局部へと針が及んでゆくという、じつに残虐な工夫がな

されていた。

また当時、頻繁に行われた車輪の刑は、まず車輪で身体中の骨を砕いてから、ぐにやぐにやになった体を車輪のスポークにくくりつけて高い棒の上に裸でさらすというものだ。それだけでも十分苦痛なのに、さらに鳥やねずみが肉片や目玉をついばみにやってくる。しかし、それで受刑者が死んでしまわないように食べ物や水が与えられたという。苦痛をなるべく長く味わってもらうことが、拷問者にとつてのやり甲斐なのである。

である。

引き延ばし台とよばれる拷問具もあった。これは巻き上げ機をついた寝台のようなもので受刑者の手足を徐々に引きちぎるための装置であった。中世のスコットランドを舞台とした「ブレイブハート」という映画のなかでも、メル・ギブスン扮する主人公がこの器具で手足を引き伸ばされていた。

こうしたサディスティックな責め苦には、苦痛による罪の浄化というキリスト教的背景があったらしい。

つまり、苦しめば苦しむほど罪が清められるというわけである。拷問する方も、「これは受刑者の罪を浄化するための行為なんだ」と思えば、罪の意識を感じなくて済んだのだろう。ちなみに、フランス革命のころ、ギロチンという処刑具が発明されたが、これは中世的な拷問具と違って、いかに受刑者を苦痛を与えずに処刑するかを念頭に考え出された人道的処刑具なのである。

しかし、中世の拷問具は肉体的苦痛を与えるものばかりではなかった。中には、精神的苦痛を与えることを目的に考案された、一風変わった拷問具の数々が存在していた。例えば、ゴシップ好きで、いつも他人の悪口ばかり言っている女性には「恥辱の仮面」というのが被せられた。これは鉄で作られたグロテスクな仮面で、大きな耳（なんでも聞きたがる）と眼鏡（なんでも見たがる）と大きな鼻（なんにでも鼻を突っ込みたがる）、大きな口に長い舌（なんでもべらべら言いふらす）などがついていた。嗜好きの女は、この滑稽な仮面を被せられて、鎖でつながれ街角のさらしものにされたという。

大酒飲みは巨大な酒樽をすっぽりかぶせられて町中を歩かされた。酒樽には、彼が酒に酔って起こした事件や醜態が絵画で描かれていた。ま





「鉄の処女」



「恥辱の仮面」をかぶせられた女たち（『Criminal Justice Through the Ages』より）



田中真知

たなか まち

「プロフィール」1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語」（北東部編・中南部編、凱風社）「ある夜、ピラミッドで」（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。

た、下手な演奏をした楽士は、「恥辱のフルート」と呼ばれる鉄の首輪のついた鉄製フルート（穴のところは万力になっていて、指が挟み込まれる）を掛けられた。賭博でイカサマをしたものは、巨大なサイコロやランプやパイプをつないだ重い鉄の鎖を首にかけられて、町のさらし者にされた。

いずれも罪状が一目瞭然なように形に工夫が凝らされ、その意味ではユーモラスな刑罰のような印象も受ける。とはいえ、陰口をたたいたり、大酒を食らったくらいで告発されてしまう社会状況が本当にユーモラスだったとは思えない。とくに恥辱の仮面の類は、女性に対する教会権力の抑圧を反映しているとも言われる。あるいは、これらの仮面こそ、SM的な拘束具の先駆けだったのかもしれないのではないかと、という気もする。

初めの話に戻るが、ジダンの頭突き事件に対してFIFAがなんらかの制裁を加えるという話が出てい

る。ことによると、高くてもせいぜい100万円程度の罰金だというが、むしろ、このような名誉に関わる事件にこそ、中世的な「恥辱の仮面」の刑が有効なのではないかと、あの場面を見てふと思った。もし、マテラツィイがジダンに対して悪口を言ったのが真実だったら、彼にこの仮面をかぶせて、街角に立たせるのである。屈辱的だし、本人が名誉という意味を考え直すきっかけになるのではないかと。

いずれにしても、これら中世の拷問具からは、陰険で否定的なものに向かう人間の想像力とエネルギーの底知れなさが伝わってくる。愛や肯定の感情よりも、憎悪とか、悪意とか、差別とか、暴力の方が、現実には人間をストリートに行動に駆り立て、世界を動かしているのだろう。現に今だって拷問は世界中で行われているのだし、形を変えた異端者狩り、魔女狩りは身の周りに蔓延している。拷問は過去の問題ではありえない。